

ニュージーランド訪問記

—酪農と畜産、そして生活点描 (前編：南島にて)—

はしがき

10月19日～25日、ニュージーランド (NZ) への「海外酪農研修」へ、私たちも参加しました。

「牧草と園芸」誌より、その概況をご紹介したいとお申し出をいただき、拙稿をかえりみず報告させていただきます。

主催は日本酪農青年研究連盟、本年は「第33回海外酪農研修」、NZ単独としては今回が初めて、全国から12名の老若男女が参加しました。

南半球の地は、まさに初夏を迎える季節、放牧(草地)をベースとした酪農・畜産!! そして乳業!! 濃度の高い研修を楽しむことができました。

豊かな自然のもと、『家族と友人を大切に、仕事を楽しむ』それをライフスタイルとするニュージーランド人!! 私たちは4グループに分れ、ファーム(ホーム)ステイも経験することができました。

また、至るところで、ガーデニングに趣向を凝ら

し、生活をエンジョイされる様子も垣間みることができました。それらも含め2回に分けてお伝えすることとします。

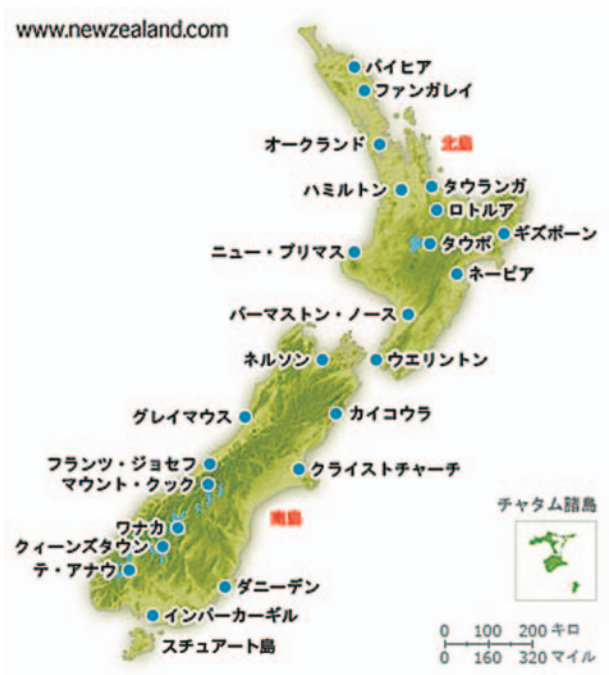
NZ20日①：[南島：クライストチャーチAP到着]

私たちは成田発の直行便にて、南島のクライストチャーチ空港に到着しました。NZは世界で最も日の出の早い国といわれ、日本との時差は3時間、現在はサマータイムが導入され、日本より、4時間進んでいることになります。

早速、クライストチャーチ市内のスーパーマーケット(PAK'N SAVE)にて、牛乳や乳製品のチェック、価格は国際相場と連動し、最近が高めに推移しているとのこと、種類の多さ、売り場面積の広さにまず驚きました。

牛乳の包装はリサイクルするためプラスチックボトルが使用され、乳成分は脂肪が3.3%に調整され、価格は2リットルで2.99NZドル(約102円/リットル)と表示されていました。この価格には12.5%の消費税が含まれ、税抜き価格では日本の約半値ということになります。

午後はカントリーワーク!! エイボン川沿いのレストランにてブッフェランチ、お年寄りご夫婦がゆったり食事を楽しんでおられる様子は、とてもほほえましいものでした。



ニュージーランド地形地図



スーパーマーケットにおける牛乳製品売り場

NZ20日②：【シングルツリーファーム】 （南島アッシュバートン地区）訪問

①農場の概要

- ・経営形態：放牧酪農、50%シェアミルク
- ・搾乳牛頭数：1,600頭（ホルスタイン・フリージャン、ジャージー、ホルスタインとジャージーのクロスブリード）
- ・主要設備：80頭搾乳ロータリーパーラー2基、待機場1,000頭、草地灌漑施設
- ・農地規模：485ha
- ・労働力：経営主+10人の労働力
- ・気候関連：日本の稚内と同緯度。年間降水量400～600ミリ

②搾乳関連

- ・パーラーでの搾乳は3人の従業員+牛追い担当1人で実施。午前は4：30～9：00、午後は13：30～17：30。おおむね1人当たりの労働時間が10時間程度になるよう調整。
- ・視察当時の乳量は最盛期であり、約28kg/日。1頭当たり4,000～5,000kg、乳脂肪率4.2%、乳蛋白率3.7%。乳質については、体細胞40万個/mlでペナルティ。
- ・平均産次は7産と長く、乳量を求めず、乳牛にストレスを与えていないことがその要因。
- ・雄子牛については、ホルスタインは肥育農家へ売却、ジャージーとクロスブリードは10日肥育後、食肉として売却。
- ・乳固形分取引であり、手取り乳価はおよそ61¢/リットル（約43円）。一方、生産費は約30¢/リットル、約50%の利益率。

③繁殖関連

- ・完全季節繁殖であり、10週間で分娩を全頭終了さ

せている。300日搾乳を実現。また、乾乳牛は6/1～8/1は、他の牧場に預託し、ケール、ビートなども給与している。

- ・およそ60～70頭/日の発情があり、搾乳時にしっかり見極め人工授精を実施。また、尻尾の付け根にカラーリングすることで、人工授精対象牛の分類を行なっている。
- ・改良の考え方としては、ホルスタインとジャージーの双方の長所を持ったクロスブリードを追求。
- ・受胎率は約60%であり、10/24以降の不受胎牛は自然交配による種付けを実施。

④飼料給与、草地関連

- ・放牧主体であり、草地はペレニアルライグラスとシロクロバが主体（ライグラス約80%、シロクロバ約20%）、チコリーを加えることもある。シロクロバはワイルドタイプとコモンタイプが半々。ライグラスにはエンドファイトが接種されている。



ライグラス主体草地、この区画はサイレージに調製される



ロータリーパーラーでの搾乳とカラーリング



地形が平坦で牧草地への灌漑が発達している

- ・冬期の3カ月間はデントコーンサイレージとナタネ油粕を給与（直接放牧地にバラ撒く）。配合飼料の給与はゼロ。
- ・牧草地は38区画あり、1区画12.5ha、1,600頭を約500頭の3群に分けて放牧を実施。
- ・カンタベリー地域は灌漑農業が発達しており、こちらにも、ロトレイナーおよびピボットスプリンクラーにて散水されている。伸びすぎた草地は、ラップサイレージに調製し、冬場に備える。

NZ20日③：【農業者連盟ミッドカンタベリー支部】訪問

農業者連盟（FEDERATED FARMAERS）は全国的な組織であり、その地域オフィスを訪問した。

代表者、酪農担当、耕種担当の3名の方々より、概況説明をいただいた。

①地域の酪農概況

- ・ミッドカンタベリー地区は、従来、牧羊の方が多かったが、1973年～74年にイギリスがECに加入したこと、化学繊維が発達したことにより、羊毛が輸出不振に陥り、加えて羊肉も不振となった。
- ・この地区は牧草にとっては好適な気温であり、降水量の少なさも灌漑により克服することができた。
- ・2,001年のフォンテラ設立にも後押しされ、牧羊から酪農への転換が進んできている。

②農業者連盟の概要

- ・農業者をサポートとする政府公認の組織であり、政策の決定と会員へのサービスが中心。
- ・アドバイスは、一般事項、経済的事項、健康と安全に関する事項、羊、肉牛、酪農中心、耕種農業、山岳、畜種混合、養蜂、鹿、など産業別の情報提供も行なっている。
- ・政府の意思で設立された組織であるが、政府から

の資金援助はなく、会員資格（会費）とボランティアで成り立っている。会員は大きな農家の80%前後とのこと。

- ・運営としては、本部と12地域支部からなり、①コールセンター②アドバイザー（法的な問題）③トレーナーなどの役割を分担し、電話での相談はコールセンターに集中させている。
- ・カンタベリー地区は降水量が少なく、種子生産地帯ともなっている。牧草では、ライグラスが70%、シロクロバなどが続き、アメリカ、オーストラリアへ輸出している。

NZ21日：【マウントクック往復】

- ・朝、早めにクライストチャーチ市内のホテルを出発、途中、昨日訪問した、アッシュバートンを通り、その後、ジェラルディンにて休憩した。
- ・やがて、3,000m級の「南半球のアルプス」と称される山々に接近し、車窓より、遠くには、まだ沢山の冠雪をいただく山々を望み、近間には、若



冠雪をいただくアルプスと放牧草地



農業者連盟の地域オフィスにて記念撮影



テカボ湖畔にて、桜が咲いていた



マウントクックに近づくとき荒漠草地在り広がる



八重桜と藤の花が見ごとであった



マウントクックの手前の山々



生垣と芝生中心のお庭

草を食む、数えることの出来ない羊群や肉用牛が現れ、これこそ、まさにNZの放牧畜産だと目を見はりました。

- ・テカポ湖畔にて、昼食そして散策!!教会や牧羊犬の碑などがあり、「星空観測」にも適した地との説明を受けた。(湖の真正面がマウントクック!!)
- ・テカポ湖畔を後にし、プカキ湖、そしてマウントクックへとバスが走る。荒漠草地在り、昔、訪れた、中国新疆ウイグル自治区のウルムチから天山(天池)への草原と重なってくる。
- ・マタゴウリ(ブッシュ状)やタゾック(ヒース状)の植生が広がり、放牧の羊群や肉用牛を目にすることもでき、荒蕪地で生きるたくましさを感じた。
- ・マウントクックに到着したが、あいにくの曇天、それでも、雪をいただく手前の厳しい山々、そして氷河の雰囲気を見ることができた。
- ・マウントクックを後にし、バスは、来た道をクライストチャーチへ向って引き返した。片道350km、往復すべて、一人の運転手さんが頑張ってく

れた。

NZ21~22日:【ガーデニングシティー】点描

- ・クライストチャーチ市は「ガーデニングシティー」と称され、市内には大きな公園があり、エイボン川沿いの静かな邸宅・庭園など、多くの見どころがあった。
- ・ホテルで2泊したが、早朝、その周辺を散策した。中心部に向って、邸宅が続き、離れると、極く普通の住宅が広がり、いずれも、味のあるお庭を拝見することができた。
- ・外国へ行って、その国の方々の生活のありように触れることは、とても興味深いこと!!メンバーの1/2は、思い思いに早朝散策されていた。中でも「南十字星」組みは、夜遅く、そして、朝4時頃からと、精力的に行動されていた。

NZ22日:【南島→北島オークランドAP】

- ・クライストチャーチのシンボル、大聖堂(カテドラル)、エイボン川沿いの邸宅(モナ・ベイルな



エイボン川沿の邸宅

ど)を散策、その後、北島への移動のため空港に向う!!昼食をはさむ1時間半のフライト、メンバーは思い思いの昼食を買い込み、オークランドへ向け、機上の人となる。

- ・機上からの「クライストチャーチ&カンタベリー平野」の光景!!【高くそして巾のある生垣】!!

それが、風よけ、日よけ、そして、動物・小鳥を守っている。雪がふっても、NZでは牛舎も羊舎もない。

- ・滑走路周辺の緑地にも羊が放たれており、さすがニュージーランドと感心した。

(後編は、北島の概況をお届けします)



【高くそして巾のある生垣】!!



平成21年度 「酪総研シンポジウム」

と き：平成22年1月28日(木) 13:00~17:00

と ころ：第二水産ビル8階大会議室(札幌市中央区北3条西7丁目)

【国内外における企業、団体等の再編動向とその対応について】

…変貌する市場環境において酪農乳業はどう対応していくか!!…

- (1) 酪総研所長 ご挨拶
「雪印メグミルク(株)経営統合の概要と今後の酪総研事業について」
酪農総合研究所 所長 内藤 博
- (2) 第1部基調講演
「食品産業における業界再編の動向とその方向性について」
東京大学大学院 経済学研究科 准教授 矢坂 雅充
- (3) 第2部話題提供
 - ①「J A道東あさひの設立と展望について」
道東あさひ農業協同組合 代表理事組合長 原井 松純
 - ②「酪農経営形態の変化について」
北海道立十勝農業試験場 生産研究部 主任研究員 原 仁
- (4) 総合討議

※ 参加無料、定員200名

※ 希望者は、必ずFAXにてお申込みください。(所属・お名前)

FAX: 011-704-2417

※ 定員になり次第、締め切らせていただきます。

雪印メグミルク(株)酪農総合研究所

TEL 011(704)2131